

第7回白壁賞は八尾恒良氏らが、 第26回村上記念「胃と腸」賞は 岩下明德氏らが受賞

2001年9月19日(水)、一ツ橋ホールで行われた早期胃癌研究会の席上、第7回白壁賞と第26回村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。第7回白壁賞は八尾恒良・他「Phlebosclerotic Colitis: Value of Radiography in Diagnosis—Report of Three Cases」(Radiology 214: 188-192, 2000)に、第26回村上記念「胃と腸」賞は岩下明德・他「胃カルチノイドの臨床病理学的検索—特に Type I (A型胃炎に合併) と Type III (sporadic) のリンパ節転移率について」(胃と腸 35: 1365-1380, 2000)に贈られた。

司会の渕上忠彦氏(松山赤十字病院消化器科)から、まず白壁賞受賞者の発表があり、受賞者代表として八尾氏(福岡大学筑紫病院消化器科)が紹介された。本賞は、故白壁彦夫氏のご業績をたたえて、消化管の形態・診断学の進歩と普及に寄与した論文に贈られるもので、「胃と腸」に掲載された論文に加え、応募論文も選考の対象となる。今回は「胃と腸」35巻に掲載された全論文と応募のあった英文論文2篇が選考対象となった。なお、八尾氏は、第17回の村上記念「胃と腸」賞を「X線・内視鏡所見からみた Crohn 病の術後経過」で受賞している。

選考委員会を代表して西上隆之氏(兵庫医科大学第2病理)から、選考委員会で慎重に審査が行われ候補論文が絞られた後、全編集委員による厳正な投票によって受賞論文が決定したとの選考経過が報告され、「本論文は、今まで世界に報告のない、大腸壁に静脈硬化が起こる病変の詳細な検討をし disease entity として確立した貴重な論文である。おめでとうございます」と祝辞を述べた。

続いて、編集委員長の牛尾恭輔氏(九州がんセンター)は「phlebosclerotic colitis は、私自身 10 年くらい前に全く診断できなかった。八尾先生が、世界ではじめて見つけられ、診断できるようになった。八尾先生に感謝したいと思う」と述べ、賞状と賞牌を授与した。

引き続き、金原優医学書院社長からは賞金が贈呈された。

受賞者を代表して八尾氏は、「この phlebosclerotic colitis の症例は今から 13 年くらい前にこの研究会でプレゼンテーションさせていただいたもの。名誉なことで、日本の形態学を世界に発信する役に少しでもお役に立てたかなと思う。これで終わりにせずに、もう少しが



▲満員となった早期胃癌研究会会場(一ツ橋ホール)。



▲選考経過を述べる西上隆之氏。

んばらせていただかないと白壁賞に恥ずかしいと思う。今日は本当にありがとうございました」と感謝の言葉を述べ、満場の拍手を受けた。

続いて、第26回村上記念「胃と腸」賞の受賞者が発表され、岩下氏(福岡大学筑紫病院病理)が紹介された。本賞は、故村上忠重氏のご業績をたたえ、消化器、特に消化管疾患の病態解明に寄与した論文に贈られるもので、「胃と腸」35巻に掲載された全論文の中から選ばれた。なお、岩下氏は第12回村上記念「胃と腸」賞を「villous tumor の病理診断—生検診断、癌化の問題を含む」で受賞されていて、今回は2度目の受賞となった。

選考委員会を代表して、西上氏から、白壁賞同様、選考委員会から推薦された候補論文の中から全編集委員の厳正な投票の結果選ばれたと説明し、「胃の典型的なカルチノイドの症例を 72 例の多くを集めきれいな肉眼写真や組織写真を網羅している。比較的予後がいいと思われる Type I について、Type III と同様に転移がありそれほど予後は良くないという論文である」と述べた。

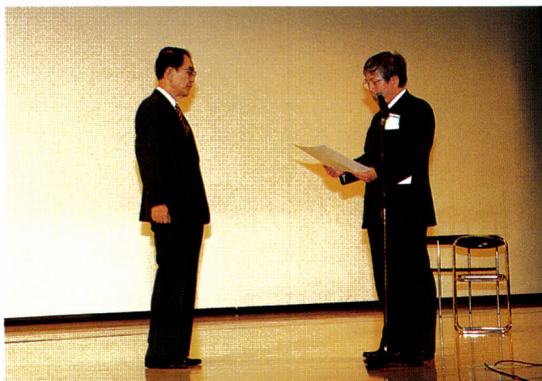
牛尾氏からは、「今後ともよい仕事をされますことを切に希望いたします。おめでとうございます」との言葉



▲第7回白壁賞を受賞した八尾恒良氏.



▲第26回村上記念「胃と腸」賞を受賞した岩下明徳氏.



▲牛尾恭輔氏(右)から賞状を授与される八尾氏(左).



▲牛尾氏(右)から賞牌を授与される岩下氏(左).

とともに賞状と賞牌が贈られた。

続いて金原社長から賞金が贈呈された。

受賞者を代表して岩下氏は「名誉ある大賞をいただき大変光栄である。消化管カルチノイドには興味を抱いてきたので今回の受賞は特別にうれしく思う。受賞論文を書き上げるに際し人と人との協調性の大切さと、その人の人間性は信じるがその人が行った行為すなわち論文は

疑うということが大事だということを痛感した。今後も病理形態学に精進し微力ながら患者のために役立つよう努力していきたい。最後に、八尾恒良先生、淵上忠彦先生、八尾隆史先生(九州大学形態機能病理)、秘書の副島由美嬢、本論文の執筆中に父の葬儀が重なった際にも励まし続けてくれた妻に感謝したい」と述べ、会場から盛大な拍手を受けた。